

平成 30 年 6 月 30 日現在

機関番号：33304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381108

研究課題名(和文) 生きる力を育成する文章表現科目のプログラム評価と授業改善ツールの開発

研究課題名(英文) Considering Assessment for Writing Programs towards Developing Generic Skills

研究代表者

山本 啓一 (YAMAMOTO, Keiichi)

北陸大学・経済経営学部・教授

研究者番号：30341481

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、文章表現科目の改善に資する理論的枠組やツールの提供を主目的としている。研究成果としては、文章表現科目の質を向上させるために押さえる6つのポイントを明らかにした上で、新たな知見として3点を提示できた。第1に、読み手に対して説得や共感を求める「対人課題型」テーマと、自己の経験を振り返る「対自己課題型」テーマ、様々な情報から課題を発見し、解決策を構想・表現するタイプの「対課題型」テーマを融合するテーマ設定が重要であるということである。第2に、アクティブラーニングの導入によって生じる課題とその解決方法に関する視点を提示した。第3に、学力の3要素を育成するALと授業設計の類型化を行った。

研究成果の概要(英文)：The main objective of this research is to provide tools and a theoretical framework that contributes to improving Writing programs in higher education. As a result of the research, three more points could be presented after clarifying the six points that should be kept in order to improve the quality of Writing programs. First, it is important to set a theme that combines three types of theme, "Interpersonal type theme" seeking persuasion and empathy to readers, "Reflective type theme" looking back on his/her own experience, "Subject-matter type theme" discovering appropriate problem and solution from various information. Secondly, we presented perspectives on problems caused by introducing active-learning methods, and its solutions. Thirdly, we classified the active-learning methods and the program design to nurture three types of ability.

研究分野：初年次教育

キーワード：文章表現科目 初年次教育 アクティブラーニング 学力の3要素 生きる力

### 1. 研究開始当初の背景

(1)文章表現科目はいまや8割以上の大学で導入されるほど一般的な科目になったが、それでも多くの大学で混乱が見られている。開講形態も、リメディアル科目や初年次科目、アカデミック・ライティング等様々な科目で導入されている。また、様々な分野の教員が複数で担当することが多い。そしていざ開講となると、カリキュラム、シラバス、授業の運営は、担当者の持つ経験やノウハウにまかされてしまうことが多い。複数担当者の場合は、担当者間での教育目標や授業スタイルの違いから、シラバスの不統一(自由裁量)につながりやすい。その結果、指導計画や教材・配布資料も、各担当者が個別に準備する事になりやすい。

(2)文章表現科目は、組織的な質保証を担保する教育システムの一貫として展開されていないことも多い。科目の到達目標が学部 DP と紐付いていない場合も散見される。レポート評価も教員によってバラバラなことが多く、ループリックなどを活用した評価方法は普及しているとは言い難い。

(3)すなわち、多くの大学において開講されている文章表現科目は、その目的・達成目標・授業計画・評価のいずれの局面においても混乱が見られる。だが同時に、担当教員の多くは、こうした現状に関して問題意識を持ち、解決策を求めている。

### 2. 研究の目的

(1)多くの大学で混乱が見られる文章表現科目の授業デザインを調査し、類型化・体系化を行う

(2)キャリア教育や専門基礎教育などに分断されがちな現状をのりこえ、生涯教育の観点から「言語を通じて生きる・生涯学び続ける力を獲得する」文章表現科目の可能性を探る。

(3)「生きる力」を獲得するための文章表現科目のモデルを構築したうえで、文章表現科目を評価し自己改善に資する評価ツール(ループリック)および授業改善ツールを開発する。

(4)こうしたツールを公開し、ワークショップ等を実施することにより、多くの文章表現科目担当者の授業改善に貢献することとする。

本研究の意義は、初年次科目やアカデミック・ライティングの分野で展開されてきた文章表現科目に対して、キー・コンピテンシー等の観点という新たな枠組を提供することにある。文章表現科目が、「語彙・文法思考」や「学びの基礎思考」、「学術志向」にとどまることなく、より広い観点から学生の「生きる力」を獲得するための科目として位置づけられることは、文章表現科目の意義と可能性を広げることにつながるであろう。

### 3. 研究の方法

(1)文章表現科目担当者等が多く参加するシンポジウムや FD セミナー等で、教員へのアンケートやヒアリング等を実施し、シラバス

のねらいや到達目標等を元に、現在展開されている文章表現科目を改めて類型化した。大別すると、リメディアル系、キャリア教育系、リテラシー育成系、アカデミック・ライティング系の4種類となる。作成させる文章のパターンも、自己表現系、ビジネスライター・手紙系、論理的主張系、論証系等に分かれる。授業方法は、個人ワーク系、ペアワーク系、グループワーク系の3つに分かれる。授業設計は、各コマ単独実施型、複数コマを組み合わせるユニット型、全体で1本のレポートを作成する大作型の3つに分かれる。

(2)文章表現科目が実施されている授業をパターン化すると同時に、これらをさらに理論的な観点から統合し、以下に示す4つの枠組みとしてモデル化した。これらのモデルを、様々な公開 FD セミナーにおいて提示し、実際に文章表現科目を担当している教員たちと対話を繰り返しながら、修正を続けてきた。以下に、本研究を通じて構築した4つの枠組みを示す。

### 4. 研究成果

#### (1) 6つのポイント

文章表現科目の質を向上させるためにおさえなければならない点として、以下の6つのポイントを指摘した。

A ディプロマ・ポリシーと連動した目的・目標の設定とシラバスの作成

B ライティング・プロセスの重視

C 授業のユニット化

D 対人・対自己・対課題の3領域を意識したテーマ設定

E アクティブラーニングの組み込み

F 教育観を相対化したうえでの教員の協働

このうち、AとEについては文章表現科目以外にも当てはまる内容だが、その他は文章表現科目特有の問題である。授業設計と教材作成のレベルにおいてこれらを踏まえられかどうか重要になってくる。

(2) 3領域を意識したテーマ設定とその融合  
上記のポイントのうち、Dに関する内容を掘り下げてモデル化を行った。文章課題のテーマは、キー・コンピテンシーの観点にもとづき3領域に分類できる。第1に、読み手を意識し、読み手に対して説得や共感を求めるタイプの文章課題を「対人課題型」テーマと呼ぶ。第2に、自己と向き合い、自己の経験を振り返り、そこからの気づきを求めるタイプの文章課題を「対自己課題型」テーマと呼ぶ。また、様々な情報から課題を発見し、課題を解決するための方法を構想し、その内容を論理的に表現するタイプの文章課題を「対課題型」テーマと呼ぶ。これらは具体的には、就活等のエントリーシートや、ビジネス文書や商業文、論証型レポートなどの違いによって現れてくる。文章表現科目においては、1つのタイプのみを扱うことが多いがこれらを使い分けられるようになる指導が、初年次教育においては重要であろう。

さらに、これらの3類型を融合させたテーマ設定を考える必要があるという点が、本研究から導き出される提言である。

一般的に、対課題型テーマは日本語リテラシーを育成するために設定され、対自己型テーマはリフレクションのために設定されることが多い。しかし、往々にして、学習者のレポートが、当事者意識に欠けた課題解決策の提案や、逆に社会的な視点を欠いた自己中心的なモノログになることが多い。

そこで、社会課題に対して当事者意識をもとに考えさせたり、自分の内面的な興味関心を社会課題と接続させることが求められる。つまり、社会的課題に対して個人的な問題意識を接続すること(課題の問題化)、個人的な問題意識が社会性を持つことを意識させること(問題の課題化)、さらに、独りよがりではなく読み手の説得や共感が得られることの3つは、3類型としてばらばらに扱うテーマではなく、一体として総合的に捉えられるべきことであるとわかる。こうした観点をふまえた課題設定により、知識を自分事として活用する力を育て、社会の一員としての自己の経験を見つめ、そこから生まれた自分の考えを他者に伝達できる力を育成することになる。そのことを通じて、文章表現科目は「生きる力の育成」に近づいていくといえる。

### (3) ALの導入と深化

Eのアクティブラーニング(以下AL)の導入についてもさらに掘り下げてモデル化を行った。まず、AをもとにBとCをふまえると、文章表現科目の位置づけが明確になり、資料読解やアイデアの共有といったプロセスも授業に組み込まれる。その際にALが導入されることも多い。ただし、ALを組み込み、インプットを増やし、協働で思考するプロセスを強化しても、やはり没個性的な文章や、社会課題を他人事として捉える文章や、ALで生じがちなフリーライダー問題は解消されないことが多い。

本研究の大きな成果として提示できるのは、ALを導入することで生じる課題は、ALをさらに深化させことで解決可能となるという視点である。2017年3月に公示された小中学校の次期「学習指導要領」では、アクティブラーニングという言葉の代わりに「主体的・対話的で深い学び」という言葉が登場した。この「主体的・対話的で深い学び」というキーワードを手がかりにすると、アクティブラーニングの深化を通じて先の課題に対応できることが見えてくる。

以下の表で図式化したように、「主体的」「対話的」「深い学び」に対応するのは、対自己・対人・対課題という3つの領域と関わる資質や能力でもある。すなわち、ALを深化させることによって、授業を通じて育成可能な力が、語彙や文法といったリメディアル的な観点から、次第にいわゆる学力の3要素のすべてに広がっていくことが示唆される。

表1 ALの導入と深化によって発展する「育成したい能力・資質」

	導入以前の段階	導入の初期段階	導入の発展段階
主体的(対自己)	学生が文章表現科目の意味を理解できておらず、いやいや書かされている。	学生が文章表現科目の意義を、職業との関連性で理解し、文章を書くことに興味を持てる。	リフレクションのプロセスがライティングに埋め込まれ、自己の経験から学び、成長につなげられる。
対話的(対人)	学生間の対話は存在しない。フィードバックも教師の添削やコメントのみ。	ジグソー学習法等によりインプットを学生間で分担したり、アイデアを出し合うことができる。	相互批評・推敲を通じて、他者の視点を取り込み、相手に気づきを促すことができる。
深い学び(対課題)	新聞記事1本などの少ないインプットで、自分の意見を書く。	複数の資料を収集・分析し、それらを比較検討しながら自分の意見を論理的に構想し、表現できる。	社会的な課題を“自分事”として捉え、自分の立場から解決策を提案できる。

### (4) 学力の3要素を育成するALと授業設計の類型化

最後に得られた成果とは、ALの手法及び授業設計のポイントを、ALの3要素(主体的・対話的・深い学び)と、学力の3要素(育成すべき資質・能力3つの柱)に対応させた整理を行ったことである。このマトリックスを活用すれば、文章表現科目を通じてどのような資質・能力を育成したいかによって、採用するALの手法や授業設計を設定することが容易になる。また、現在シラバスに設定されている到達目標と授業設計や方法が適否的かどうかチェックできる。

表2 育成すべき資質・能力の3つの柱と対応する授業設計及びAL手法例

観点領域	知識技能	思考力 判断力 表現力	学びに向かう力・人間性
主体的	(例)反転学習	カリキュラムマップ	リフレクション
対話的	(例)ピア・インストラクション	(例)ジグソー学習法	(例)ピア・レスポンス(協働推敲)
深い学び	インプットする知識の量と質	プロセスの重視、コマのユニット化	社会課題に対する当事者意識

本研究は、多様な文章表現科目に対して理論的な観点からモデル化を行うものであった。これらのモデルは、今後の授業改善に資する成果につながったと考える。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

大島弥生「留学生との対話授業を通じた日本語母語話者大学生の学び」『月刊国語教育研究』査読無、553 巻、2018 年

坂井美穂、赤星哲也、太田清子、藪内聡和、森迫誠、郡弘文、吉村充功「初年次における文章表現基礎講座の実際と課題」『日本文理大学紀要』査読無、45-2・46-1 巻、2017 年、pp.199-202

成瀬尚志「レポート評価において求められるオリジナリティと論題の設定について」『長崎外大論叢』査読有、18 巻、2014 年、pp.99-107

〔学会発表〕(計 14 件)

山本啓一「教員の協働体制をいかにマネジメントするか」初年次教育学会第 11 回大会、2017 年

吉村充功、島岡成治、他 5 名「高大社の協働講座による地域人材育成の可能性」大学教育学会第 39 回大会、2017 年

坂井美穂、吉村充功「初年次における日本語学力と文章表現力の相関に関する一考察」日本リメディアル教育学会第 13 回全国大会、2017 年

山本啓一、菅尾暁、林田幸宏、神陽子、藤野博行「法学部専門基礎科目における授業の協働運営について」大学教育学会第 38 回大会、2016 年 06 月 12 日

成田秀夫、山本啓一、得丸智子「ワークショップ：学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導 TAE (Thinking At the Edge) をベースにした「経験をことば化する方法」初年次教育学会第 10 回大会、2016 年 09 月 10 日

吉村充功、山本啓一、田中康友「高大接続システム入試改革と学修評価 北陸大学と日本文理大学での入試改革を例に」初年次教育学会第 10 回大会、2016 年 09 月 10 日

吉村充功、坂井美穂「ジェネリックスキル育成を意識した入学前教育の作文課題におけるルーブリック評価と日本語学力の相関に関する一考察」日本リメディアル教育学会第 12 回全国大会、2016 年 08 月 24 日

山本啓一、吉村充功、成瀬尚志、伊藤孝

行、成田秀夫「生きる力を育成する文章表現科目とは何か 対課題型タイプと対自己型タイプを統合した文章表現の意義について」初年次教育学会第 8 回大会、2015 年 09 月 04 日

成瀬尚志「剽窃が困難となるレポート課題の類型化 レポート課題における到達目標の多様性とオリジナリティとの関連について」大学教育学会第 37 回大会、2015 年 06 月 07 日

成瀬尚志「レポート評価と論題の設定について」応用哲学会、2014 年 05 月 11 日

山本啓一「社会で要求される文章表現能力の評価基準について 警察官小論文試験を事例として」応用哲学会、2014 年 05 月 11 日

成瀬尚志「初年次教育におけるレポート評価と論題の設定について」初年次教育学会第 7 回大会、2014 年 09 月 04 日

中村博幸、吉村充功、堀上晶子「初年次教育の質を高める教員協働を考える：文章表現科目の実践を例にして」初年次教育学会第 7 回大会、2014 年 09 月 05 日

成瀬尚志、安江枝里子、坂本彩希絵「3 年間を通じた文章表現科目のモデレーションについて」第 21 回大学教育研究フォーラム、2015 年 03 月 13 日～14 日

〔図書〕(計 2 件)

成田秀夫・山本啓一他「初年次教育としてのライティング科目」『進化する初年次教育(初年次教育学会 10 周年記念論集)』世界思想社、2018 年(9 月刊行予定) ページ数未定

大島弥生、中村博幸、成田秀夫、堀上晶子、吉村充功、山本啓一、桑原千幸『大学生の日本語リテラシーをいかに高めるか』ひつじ書房、2014 年、199 ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

得丸智子、成田秀夫、大島弥生、吉村充功、山本啓一、竹内幸哉「TAE(Thinking At the Edge)公開 FD セミナー」日本語表現デザイン塾・北陸大学共同開催 FD セミナー、2016年12月03日、金沢歌劇座

山本啓一「生きる力を育成する，対課題・對自己型を統合した初年次文章表現」日本語表現デザイン塾公開研究会、2016年03月19日、京都大学

成瀬尚志「知識を用いた文章表現を可能にする論題の分類・課題の設計」日本語表現デザイン塾公開研究会、2016年03月19日、京都大学

吉村充功「ジェネリックスキル育成をめざした言語表現活動における学修評価」日本語表現デザイン塾公開研究会、2016年03月19日、京都大学

中村博幸「大学における文章表現科目の過去・現在・未来と私」日本語表現デザイン塾公開研究会、2016年03月19日、京都大学

成瀬尚志、安江枝里子、坂本彩希絵「3年間を通じた文章表現科目のモデレーションについて」第21回大学教育研究フォーラム、2015年03月13日～14日、京都大学

山本啓一・吉村充功・成瀬尚志「初年次文章表現科目におけるジェネリック・スキルの養成 アクティブラーニングを組み込んだ文章表現科目の授業設計」アカデミックジャパニーズグループ定例研究会(招待講演)、2015年02月07日、東京海洋大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

山本 啓一 (YAMAMOTO, Keiichi)  
北陸大学・経済経営学部・教授  
研究者番号：30341481

(2)研究分担者

大島 弥生 (OHSHIMA, Yayoi)  
東京海洋大学・産学・地域連携推進機構・教授  
研究者番号：90293092

吉村 充功 (YOSHIMURA, Mitsunori)  
日本文理大学・工学部・教授  
研究者番号：10369134

藤 勝宣 (TO, Katsunobu)  
九州国際大学・法学部・教授  
研究者番号：00217457

成瀬 尚志 (NARUSE, Takashi)  
長崎大学・大学教育イノベーションセンター・准教授  
研究者番号：60467644

伊藤 孝行 (ITO, Takashi)  
北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
研究者番号：00588478

中村 博幸 (NAKAMURA, Hiroyuki)  
京都文教大学・地域協働研究教育センター・客員研究員  
研究者番号：20105224

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

成田 秀夫 (NARITA, Hideo)  
堀上 晶子 (HORIGAMI, Akiko)